



農業には定年がない 自慢のイチゴを いつまでも皆さんに届けたい

大府南いちごファーム
大嶋 厚徳さん



平成20年、脱サラしてイチゴ農家になった大嶋厚徳さん。今ではイチゴを使った6次産業化も手掛け、新ブランド『わたしのいちご』が新聞やテレビ番組で取り上げられ、全国で話題を呼んでいます。大嶋さんは「作って終わりではなく、どう売り出していけばいいかをしっかり考えました。自分の思いをストーリー化しながらブランディングできたので、皆さんに認めてもらえたのかな」と話します。さらに、ちまたに回るイチゴバターを試食して研究したという大嶋さん。

「自分が食べたいと思えるものを納得のいくまで追求したので、味には自信があります。一つ一つ思いを込めて手作りしていますよ」と自信がみなぎっています。

そんな大嶋さんが農業を始めたのは40歳のとき。尊敬する先輩が「仕事の原点は食べ物を作ることだよ」と話していた言葉がふとよみがえり、農業を始めてみようと思ったのがきっかけ。「自らいろんなサイトを探して、農業大学校での研修を見つけて即入校しました。若い子たちと一緒に農業のいろはを学びましたよ(笑)」と当時を振り返ります。その後、イチゴ農家のものでイチゴを専門的に学んだ大嶋さんは、現在の大府南いちごファームを開設します。「就農するにあたり、市農業委員会の紹介で素晴らしい地主さんと出会い、農地を見つけることができました。資金面で困った

ことがあれば市に相談して、力になってもらいました」と話す大嶋さん。おいしいイチゴを作るための環境づくりを徹底しているそう。資材の展示会や勉強会に積極的に参加し、いいなと思えるものはどんどん取り入れるようにしています。今は、遮光カーテンやミストなどを装備して、温度調節や湿度管理を徹底しています」と努力が垣間見えます。

農業を始めて良かったと思える瞬間は、お客さまの声がダイレクトに届くこと。それで「生懸命育てたイチゴに対して、お客さまからおいしいよと褒めてもらえることに喜びを感じます。次も頑張ろうとやる気ももらえます」と笑顔で話します。

「農業は定年退職がないので、体力が続く限り続けていきたい」と話す大嶋さん。今後について「自慢のイチゴを堪能できるイチゴ狩りで、まずは市民の皆さんに喜んでもらいたい。『わたしのいちご』は今通販の準備をしているので、全国の皆さんに自慢の一品を食べてもらいたいです」と目を輝かせて話します。大府市から全国へ。大嶋さんが人生をかけて育てるイチゴがもうすぐ全国に届けられます。



▲愛情を持って育てた自慢のイチゴです

cover

大府みどり公園にある緑のトンネルで遊ぶ双子の石原颯人くん・唯系ちゃんとお父さんの大輔さん。緑の中で親子のTシャツの白さがまぶしく輝いていました。長い梅雨が明け、暑さもひとしお。昼夜そして屋内外を問わず、熱中症にはご注意ください！

